美術の窓(90)

普賢菩薩画像に描かれた〝白象の目〟

大和文華館顧問 関口正之

法会の本尊として造られた像を拝観するとき、先ず本尊の顔を仰ぎ見ます。顔以外の部分や脇侍像を見るのはその後です。これは画像の場合も同じです。しかし、日本の平安時代後期から鎌倉時代頃まで描かれた普賢菩薩画像と普賢十羅刹女画像の諸作品は少し様子が違います。普賢菩薩を背に乗せてきた白象の視線の強さが、本尊の表現と同じように強く我々の注意をひきます。このような表現は普賢菩薩像以外の本尊画像では認められませんので普賢画像独特の特色と思われます。

普賢菩薩は、『法華経』を信奉する人のもとに六牙の白象に乗って現われ、その人を守るという誓いをたてたことが『法華経』に述べられ、そのときの普賢菩薩と白象の姿は『観普賢経』に具体的に記されております。また『法華経』提婆達多品には女人往生が説かれております。『法華経』は聖徳太子が注釈書をまとめ講義するなど古くから我国において評価されていたのにも拘わらず、女人往生の思想が注目されるのは平安時代後期からであるようです。その証拠に、平安後期から女性が発願した仏事や女性の菩提を弔らう法会において普賢菩薩像を造像した記録が俄かに目立つようになってきます。

現存する普賢菩薩像を概観しますと、とくに平安後期以後の画像では普賢像が小さめに配置され、顔は丸味のある引締った頬が清潔感を帯び、とくに伏し目勝ちに前方下辺を見つめる切れ長の目は清澄な気配をたゞよわせて気品があります。それに加えて、着衣や装身具、象の鞍などの細部をも疎そかにしない細密描写は華麗であり、この品格高く繊細な表現は、いかにも女性発願者が本尊とするに適わしい画像であるように思われます。

本尊の普賢菩薩は気高い表情を表わそうと試みているように感じられるのとは対照的に、大半の画像における象の目は何かを熱く訴える目を描いています。その目は象の目というより人間の豊かな感情をこめた目となっております。しかも象の目は、作品によって異なった眼指しで我々を見つめているように思われます。とくに画像の場合にこの傾向を指摘できます。

細見美術館本(図１)の象の目は強い主張を抱いている様子を感じさせますし、奈良国立博物館本(図２)の象は我々の心の在り様を確かめるかのような目です。静嘉堂文庫美術館本の象は何かを痛まし気に見つめる目をしており、東京国立博物館本(国宝)の象は人間の愚行を見透してなお耐えているかのような鋭い視線を向けてきます。いずれも人間の目です。

本尊の澄んだ視線と獣座動物の人間的感情に満ちた目との落差は他の仏像表現には明瞭には認められず、普賢菩薩の彫像の場合にもあまり見られません。本尊像と動物との視線の差は、普賢菩薩像を本尊とする造像で、しかも画像を描く場合にのみ現われる特色であると考えられます。

この特色は、これまでに指摘されたことはありませんので、これが現われる理由は推測の域を出ませんが、それは普賢菩薩画像の制作が盛んになってきた状況の中にあると思われます。すなわち、女性が発願者となった法会の普賢画像にのみ絵師は白象の目に人間のような視線を描いたのではないでしょうか。そして、人間の感情を込めた象の目を描くように絵師に要請し指示した人こそ女性の発願者達であったと推測できます。

本尊画は、手本となる図像か像容を記した経典の経文を参考に造られますので、一般には造像を発願した人が像容の表現に注文を出したとしても着衣の色か装飾文様などに希望が反映される程度であったと思われますので、象の視線に対し何事かを語らせようとの要請が実行されたとすると注目すべきことであります。普賢画像における白象の目は、手本通りに厳密に描くことが多い本尊画において、絵仏師が発願者の要望に応じたとは言え、僅かに見せた画家魂であったのでしょうか。

日本の普賢画像が作られた頃かその後に日本にもたらされた中国宋元時代の普賢画像においても白象が同様な眼指しをしている例があります。日本の普賢画像の象の目と同列に論じることが可能なのか今後の課題です。

また、白象の眼指しの奥深さは、次に来る鎌倉時代以降の優れた肖像画諸作品の眼光とつながるものなのでしょうか。白象の視線が気になり始めますと連想が止まりません。これも作品鑑賞の楽しみの一つであります。

図１ 普賢菩薩像(細見美術館蔵)

図２ 普賢菩薩像(奈良国立博物館蔵)

季刊 美のたより No.148
平成16年10月 9 日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.